

## 概要

本研究の問題意識は、「観光まちづくり」（それは多くの場合景観まちづくりを重要な内容としている）を現代日本における新たなタイプの社会集団（コミュニティ）の構築とそこでの活動の展開と捉え、その意義と課題を検証することにある。

本稿の第Ⅰ部では、「コミュニティ論」「内発的发展論」「観光まちづくり論」の諸議論をふまえ、現代における社会集団を「基盤型コミュニティ」（「特定の利害関心の充足」に関わらない「包括的」「基礎的」集団）と「機能型コミュニティ」（「特定の利害関心の充足」に関わる「人為的」で「空間的な領域性に準拠しない」集団）の2範疇に類型化し、これらと観光まちづくりとの接合を図った。

これまでコミュニティ論と（観光）まちづくり論は、両者が互いに影響し合いつつも別個のことがらとして議論される傾向が強かった。しかし、本研究では、観光まちづくりの担い手集団を基盤型コミュニティと機能型コミュニティが統合された「複合型コミュニティ」、すなわち機能型コミュニティであると同時に、生活諸課題一般の解決を担う基盤型コミュニティ活動との連携という課題を内包するコミュニティ活動と捉えている。したがってまた、「複合型コミュニティ」活動としての観光まちづくりを、地域社会の活性化にとって、その突破口となり得る要素を備えた活動と位置づけた。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で提示した仮説について、和歌山県海南市黒江における町並みを活かした景観づくりの事例分析を通じて、以下の3つの視点から具体的な検証を行った。

第1の視点は、黒江における観光まちづくりの必然性についてである。近年の活動の背景に、漆器産業にもとづく職住一体型の産地コミュニティの変容・衰退という事情があったことを明らかにした。第2の視点は、コミュニティの新たな局面に対する住民意識である。複合型コミュニティ（活動）としての景観づくりコミュニティ（活動）に対する住民の意識と態度の実態を捕捉した。第3の視点は、景観づくり（コミュニティ）に対する地域外部の人々の関与である。景観づくりに関わる地域外サポーターの実態と彼らの景観づくりに対する意識ならびに彼らの存在が住民意識や活動に及ぼす影響を明らかにした。

以上、具体的な検証結果を踏まえ、第1に黒江というフィールドで展開される活動には、町並みをはじめとする黒江の歴史や文化に価値を見出す地域内外の人々が関与している点、第2にこうした活動のあり方が住民の景観に対する意識に影響を及ぼし、彼らの景観づくりへの関与を促している点で、黒江の景観づくりは、その地域的性格（閉鎖性など伝統的コミュニティが持つ負の側面の残存、また高齢者が多いことなど）による困難さを孕みつつも、新たな地域アイデンティティの形成と発展に向けた可能性を有する注目すべき活動であると結論づけた。

## 学位審査結果報告書

学位申請者名	竹田茉莉耶	学生番号	27019006	専攻名	観光学専攻
論文題目	「複合型コミュニティ」の創造と観光まちづくり				
論文審査及び最終試験の成績（表記は合格又は不合格とする。）				合格	
審査委員会					
主査		山田良治		委員 堀田祐三子	
委員		田中正人			
<p>〔論文審査の結果の要旨〕</p> <p>本論文は、和歌山県海南市黒江地区における観光まちづくりの展開を分析することを通じて、そこに「現代日本における新たな社会集団の構築」を見出し、コミュニティ・地域活性化におけるその意義と役割を解明することを目指したものである。</p> <p>わが国では、過疎化・少子高齢化の顕著な進行など衰退する地域社会の活性化策として、今世紀に入る頃から観光まちづくりが広範な広がりを見せている。事例分析の対象とした黒江地区もまた、そうしたまちづくりを進めてきた一例である。論文の著者は、地域の伝統的な基盤産業であった漆器産業の盛衰とこれに代わって登場した集客・観光振興活動の展開過程、その延長上に締結された「黒江の町並みを活かした景観づくり協定」とこれを梃子とする景観まちづくりの態様、またこうした諸活動の中における地域住民の意識の変化等を、統計データ、ヒアリング、アンケート調査を通して詳細な分析を進める。</p> <p>その分析の中で著者は、景観まちづくりを進める母体となる住民組織によって構成される空間領域が、既存の自治会組織（地域コミュニティ）のそれと必ずしも一致せず、部分的あるいは領域横断的に形成される事実注目する。この場合、伝統的な地域コミュニティと景観まちづくりを担う「新たな社会集団」との関係はどのようなものとなるのか。また、「新たな社会集団」は、自治会組織と同様に空間的領域性でゾーニングされた社会集団であるが、自治会とは異なり、外部「サポーター制度」の導入に見られるような領域内部に閉じない活動形態を示していることをどう評価すれば良いのか、といった論点を提示した。</p> <p>現地調査を進めるに当たって、著者は並行して観光まちづくり、およびこれに先行する内発的</p>					

発展論に関わる既存の諸研究のレビューを行ってきたが、分析作業を通じて上述のような論点が浮上してくる中で、これらの研究業績に加えてコミュニティ論レビューの必要性を認識するに至った。さらに、著者の関心は、ともすれば分離して進められてきたまちづくり論とコミュニティ論との関係を解明し、両者を統合的に理解することに向けられていった。

これらの既存研究レビューを踏まえて著者は、コミュニティを共同・協働性を有する社会集団と認識した上で、それを伝統的な「基盤型コミュニティ」と特定目的に添って形成される「機能型コミュニティ」の二つに分類する。一般的な傾向としては、前者の衰退と後者の台頭が進む中で、しばしば地域活性化の展望を前者の再生に託す議論が散見される状況に対して、著者の立場は、「機能型コミュニティ」の発展こそが現代を特徴付けること、また、とくに空間的領域性と特定目的性を併せ持った、その意味で「複合型コミュニティ」とそれを母体とする観光まちづくり・景観まちづくりの発展の重要性を主張し、その到達点や課題を事例分析で検証している。母体としてのコミュニティとその実践活動としてのまちづくりは、このような認識フレームにおいて統合し、これを実証的に検証した研究である。

論文そのものは「第Ⅰ部 コミュニティと観光まちづくりに関する予備的考察」と「第Ⅱ部 海南市黒江のまちづくり」のⅡ部で構成されている。具体的には、第1章はコミュニティに関わる諸論点を2つの観点、すなわち「特定の利害関心の充足」に関わらない「包括的」「基礎的」集団—基盤型コミュニティ—と、「特定の利害関心の充足にかかわる機能集団」「人為的に構成される集団」「空間的な領域性に準拠」しない集団—機能型コミュニティ—における人間活動の社会的意義・役割、から整理している。第2章では、観光まちづくりおよび景観まちづくりに関する主要議論を主として共通利益性の観点から考察している。そのうえで、第3章では、第1章および第2章の考察を統合し、コミュニティ論と観光まちづくり論との接合を試みている。

第Ⅱ部第4章では、和歌山県海南市黒江の基本構造（人口・産業）および集客を企図したまちづくりの現状を概説し、伝統産業の衰退から集客を企図したまちづくりへ至るまでの経緯を詳述している。第5章は、職住一体型の産地コミュニティの紐帯が弛緩するなかで、外部との関わりを意識した取り組みが始められ、それが観光まちづくりへと昇華する過程を分析している。ここでは、まちづくりの展開を、初動期、萌芽期、展開期として捉え、そこでは主たるまちづくりの課題が産業活性化、町並み保全、集客（観光）へと変化するなか、それを担う主体が産業従事者から住民、地域外の人々へと広がりを見せていることが明らかにされている。第6章では、景観づくりコミュニティに対する住民意識・態度を分析し、既存の紐帯が残る地域における、新たな関係性創造にむけた到達点と課題を明らかにしている。結論として、端的には黒江の景観づくりコミュニティには大きく3つの意識レベルを有するグループが存在していること、景観づくりが、歴史・町並み、そして、産業や経済の活性化といった空間的に広範な課題、つまり個人の所有物である家や土地といった枠を超えた範囲の課題に意識的である住民によって支持されるということ、景観づくりに意識が向けられる前提として、人とのつながりや身近な生活課題（生活利便

性)が十分に満たされていることが重要であるということを指摘している。第7章では、景観づくりに関わる地域外の人々の背景と黒江の景観づくりに対する意識を明らかにし、「内」(地域住民)と「外」(地域外の人々)の協働による実践の意義と課題を考察している。地域外の人々(サポーター)は「外部」者の立場から、黒江のまちづくりの状況を客観的・俯瞰的にとらえていること、地域住民の結束や地域住民自身におけるビジョンの共有の必要性が重要であると認識している点で、黒江の景観づくりに今後も重要な役割を果たすことができることを指摘している。第8章では、事例分析の総括として、黒江における「観光まちづくり」の意義と課題を考察している。

上述のように研究プロセスとしては第I部から第II部へと重点を移しながら進められたが、論文の叙述に当たってはそうして究明された第I部の理論的フレーム・観点に基づいて第II部の分析が展開されている。

まちづくり論とコミュニティ論とを統合的にリンクし、「複合型コミュニティ」という概念の下に詳細な事例分析・検証を行っている点に本論文のオリジナリティが認められるとともに、今後のまちづくり論、コミュニティ論の発展に一石を投ずる研究業績であると評価できる。

#### [最終試験の結果の要旨]

最終試験においては、主として以下の論点を中心に質疑が行われた。

1) 地縁・血縁に基づくコミュニティと目的意識型の社会集団については従来から様々な概念で表現され、議論がなされてきたところであるが、本論文においてこれをあえて「基盤型コミュニティ」と「機能型コミュニティ」という二項対立的な概念化を行った理由は何か？

➤ コミュニティという概念は、一般に伝統的な地域コミュニティを表象したものであり、目的意識型の社会集団はこれとは別次元の集団化および集団的活動として認識されている。本論文では、両者の社会集団としての同質性を強調する立場から、あえてコミュニティとして一括し、その上で両者の相違と相互関係に着目して事態を認識するため、こうした概念化を行った。

2) 「複合型コミュニティ」の成立条件は何か？

➤ ある目的を共有する集団化が、空間的領域性を有する地縁集団として顕在化する事態が発展することにある。その典型例が景観まちづくりであるが、この場合一定の空間領域生成の根拠は、その空間範囲を保全したり改良したりしようとする社会的な美意識の発展にある。観光振興という普遍性の強い経済的基盤を持った、その意味で職住一体型のコミュニティは、とくに景観まちづくりにおいて発生しやすいと考えられる。

3) 黒江地区を対象に「複合型コミュニティ」の分析・検証が行われているが、この概念の適用範囲はどのように考えれば良いか。

- 複合型コミュニティが職住一体性を基盤とする限りでは、大都市よりは中小都市、中小都市よりは農山村地域における基礎的・一次的な生活圏において具現化しやすいと考えられる。その一方で、景観形成を目的とする様々な空間領域を対象として発生しうるものであり、その意味では多層的なコミュニティとして存在し得るものである。

以上、審査委員の質問に対して論理的かつ的確な回答がなされた。今回提示された理論的フレームを起点に、さらに観光まちづくりと地域再生に関わる研究の発展を期待しつつ、最終試験について、合格と判定する。